



TITLE:

# 移流拡散方程式の有限要素近似(ナビエ・ストークスの方程式の解)

AUTHOR(S):

池田, 勉

---

CITATION:

池田, 勉. 移流拡散方程式の有限要素近似(ナビエ・ストークスの方程式の解). 数理解析研究所講究録 1983, 476: 99-110

ISSUE DATE:

1983-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/103319>

RIGHT:

# 初流拡散方程式の有限要素近似

(財) 電力中央研究所 池田 勉

1. はじめに 熱対流問題におけるエネルギーの式は、  
次のよう初流拡散方程式によって定式化される：

$$(1) \begin{cases} \frac{\partial u}{\partial t} + B \nabla u = a \Delta u + f & \text{in } \Omega \times (0, T) \equiv D, \\ \frac{\partial u}{\partial n} = 0 & \text{on } \Gamma_N, \quad u = u_b \text{ on } \Gamma_D, \\ u = u^0 & \text{in } \Omega \text{ at } t = 0. \end{cases}$$

ここに、 $\mathbb{R}^2 \supset \Omega$  : polyhedral domain, その境界  $\partial\Omega = \Gamma_N \cup \Gamma_D$ ,  
 $0 < T$  : fixed,  $0 < a$  : 正定数,  $B \in \{C(\bar{\Omega})\}^2$ ,  $f \in C(\bar{D})$ ,  
 $n$  :  $\partial\Omega$  上への外向き単位法線ベクトル,  $u_b \in C(\bar{\Gamma}_D)$ ,  $u^0 \in C(\bar{\Omega})$   
である。

この報告では、(1) の有限要素近似について述べる。

数値解法の作成の際には、安定性・収束性およびその他の  
議論だけでなく、連続問題が持つ物理的構造の離散化  
された問題ではどうなるかに注目すべきであるという観点  
から (1) の有限要素近似を考えていく。方程式 (1) の滑らかな解  
 $u$  は、「最大値原理」

$$\min \left\{ \min_{\bar{\Omega}} u^0, \min_{\bar{\Gamma}_D} u_b \right\} + t \min \left\{ 0, \min_{\bar{\Gamma}} f \right\} \leq u(x, t)$$

$$\leq \max \left\{ \max_{\bar{\Omega}} u^0, \max_{\bar{\Gamma}_D} u_b \right\} + t \max \left\{ 0, \max_{\bar{\Gamma}} f \right\}$$

を満たす。さらに、 $\Gamma = \bar{\Gamma}_N$ ,  $\operatorname{div} \mathbf{B} = 0$  in  $\Omega$  の場合には「保存則」

$$(3) \quad \frac{d}{dt} \int_{\Omega} u d\Omega = - \int_{\Gamma} u \mathbf{B} \mathbf{n} d\Gamma + \int_{\Omega} f d\Omega$$

も満たす。たとえば、未知関数  $u$  が温度を表わし、熱入力がない ( $f \equiv 0$ ) 場合と考えよう。このとき、(2) は最高温度、最低温度とも境界上の点あるいは初期状態からとらえることを示し、(3) は  $\operatorname{div} \mathbf{B} = 0$  in  $\Omega$ ,  $\mathbf{B} \mathbf{n} = 0$  on  $\bar{\Gamma}$ , 断熱境界条件ならは全熱量が保存されることを示してゐる。最大値原理、保存則とも上記のように物理的に重要な意味を持つので、(1) の離散近似解がこれらの法則の離散アナロジーを満たすかどうかは興味深い問題である。とりわけ、離散最大値原理の成立・不成立は数値計算の安定性にも係わる重要な問題である。

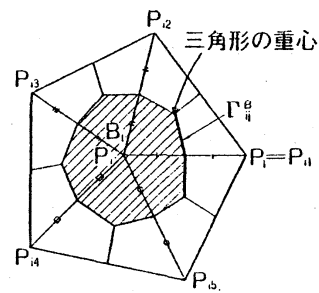
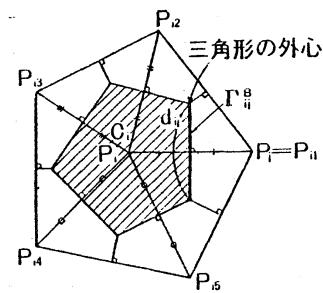
初流速度  $|\mathbf{B}|$  の拡散係数  $\alpha$  に比べて相対的に小さいときに離散最大値原理を満たす計算法を構成するのは比較的容易であるが、 $|\mathbf{B}|/\alpha$  が大きい際にも、空間メッシュ中を厳しく制約しなくても離散最大値原理が成立する計算法を構成するには特別な工夫が必要である。そのようは工夫として、差分法

では (i) 上流差分法と (ii) 人工拡散項を導入する方法が  
 考案されている。一方、領域の形状および節点の位置に対す  
 る柔軟性、境界条件の表現の容易さなどの点で優れているた  
 め、差分法に代って数値計算の主流になってきた有限要素法  
 に関しても、差分法での工夫 (i), (ii) に対応して次のよう  
 な方法が開発されてきた。

- |           |   |
|-----------|---|
| Scheme A. | Tabata's upwind scheme [9]              |
| Scheme B. | Baba-Tabata's upwind scheme [1]         |
| Scheme C. | Kanayama's upwind scheme [7]            |
| Scheme D. | Ikeda's artificial viscosity scheme [3] |
| Scheme E. | Ikeda's partial upwind scheme. [5]      |

これらの解法は、次のような共通の特徴を持つ。

- 。 Galerkin 式有限要素法である。すなわち、(1) の弱型式  
 の有限次元アナロジーとして定義される。
- 。 有限要素分割は弱鋭角型と規定する。領域を鋭角三角  
 形および直角三角形で分割し、未知関数を各三角形上で  
 は線形な連続関数で近似する。
- 。 時間微分項には質量集中型の近似 (圧力的定数関数に  
 よる近似) を用いる。質量集中化の方法としては、

図 1 重心領域  $B_i$ 図 2 外心領域  $C_i$ 

Scheme A, B では重心領域 (図 1), Schemes C, D,

E では外心領域 (図 2) が用いられる。

- 全てのスキームの解が空間ささみ中に対する制約条件なしに、離散最大値原理を満す。

また、離散保存則は Schemes B, C, D, E では満にされるが、Scheme A では満にされない。

さて、各スキームの詳細な記述はオリジナルの論文はもとより、池田 [4], Ikeda [5] にも述べてあるので、ここでは、各スキームの特徴だけを述べるにとどめる。

Scheme A. Tabata's upwind scheme

普通の Galerkin 近似では、各節点  $P_i$  での  $\nabla W_h$  の値は  $P_i$  の回りの全ての要素上での  $\nabla W_h$  の値を用いて近似されることになっているが、このスキームでは、流速  $u$  に関する上流要素  $e_i$  上での値だけで  $(\nabla W_h)(P_i)$  を表現する。  $P_i$  での  $u$  に関する

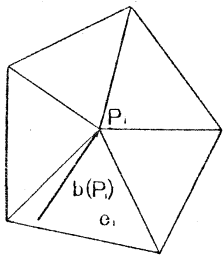
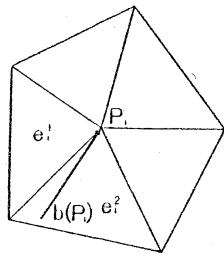
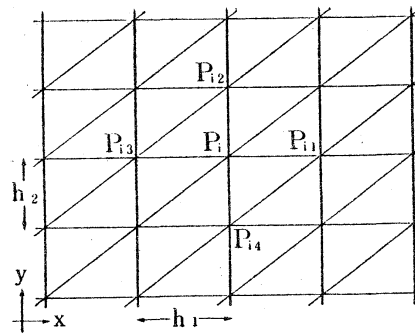
図 3 上流側要素  $e_i$ 図 4 上流側要素  $e_i^1, e_i^2$ 

図 5 Friedrichs-Keller 型有限要素分割

る上流要素とは  $P_i$  の終点にならうにベクトル  $\mathbf{B}(P_i)$  を描いたときに  $\mathbf{B}(P_i)$  を含む要素のことである。(図3)

上流要素の存在を保障するための条件として、 $\mathbf{B} \cdot \mathbf{n} \geq 0$  on  $P_N$  であることが要求される。このスキームは、 $\alpha = 0$  の場合(移流方程式)へも適用できる。

流速  $\mathbf{B} = (b_1, b_2)$  の成分毎に上流要素  $e_i^1, e_i^2$  (図4)をとり、 $(\partial W_R / \partial x)(P_i)$  は  $e_i^1$  上の値で、 $(\partial W_R / \partial y)(P_i)$  は  $e_i^2$  上の値で表現することにより、移流項を近似してもよい。この方式をとると、Friedrichs-Keller 型の分割(図5)では、Tabata's scheme は上流差分法と一致する。しかし、Union-Jack 型分割の場合は、上流差分法と一致しない。

### Scheme B. Baba-Tabata's upwind scheme

このスキームは離散最大値原理のみならず離散保存則も成立するように設計されたものである。移流項の近似は次のようにして定められる。

(a) 移流項の弱型式  $\int_{\Omega} (\mathbb{B} \nabla u) \cdot \phi \, d\Omega$  を

$$\int_{\Omega} (\phi \operatorname{div}(\mathbb{B} u) - \phi u \operatorname{div} \mathbb{B}) \, d\Omega$$

と書き換え、 $\phi$  および第2項の  $u$  を重心領域に基づいて質量集中化する。すると、Green の公式によって上記積分は、

$$\sum_i \phi(p_i) \int_{\partial B_i} \mathbb{B} (u - u(p_i)) \, n_i \, d\Omega$$

( $n_i$  は  $\partial B_i$  上の外向き単位法線ベクトル)

とかける。

(b) 重心領域の境界  $\partial B_i$  上での未知関数の値とその上流側の節点での値で近似する。

Scheme C. Kanayama's upwind scheme

Baba-Tabata's scheme では重心領域を用いて移流項の近似が構成されている。重心領域の代わりに外心領域を利用して、Baba-Tabata's scheme と同様の方針によって移流項の近似を構成しているが、Kanayama's scheme である。このスキームは上流差分法の不規則メッシュの拡張に依っている。実際、図6のようには直交格子を用いて分割 (Friedrichs-Keller 型分割,

Union-Jack 型分割法を含む) の際には, Kanayama's scheme は (1) の上流差分近似と一致する。

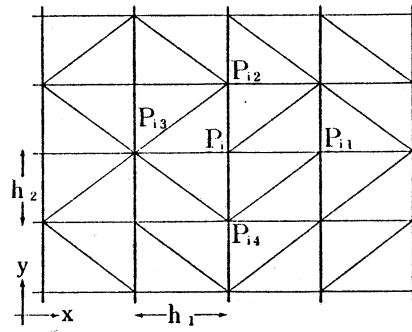


図 6 直交格子を利用した一般的有限要素分割

Scheme D. Ikeda's artificial viscosity scheme

空間一次元の場合には, 上流差分近似より人工拡散項を導入する方法の方が誤差が小さいことに注目して, 人工拡散項を導入する有限要素法を構成したものである。初流項の弱型式は Kanayama's scheme の場合と同様に

$$\sum_i \phi(P_i) \int_{\partial C_i} B(u - u(P_i)) \tilde{n}_i \, d\Omega$$

( $\tilde{n}_i$  =  $\partial C_i$  上の外向き単位法線ベクトル)

に変形, 近似されるが, 外心領域の境界  $\partial C_i$  上での未知関数の値は両側の節点での値の平均値で近似される。これは上流型の近似としないことを意味している。その代りに, 各要素  $e$  ごとに一定値

$$\max \left\{ 0, \frac{1}{2} (e \text{ の最大辺長}) (e \text{ の } |B| \text{ の最大値}) - \alpha \right\}$$



を拡散係数とする人工拡散項が導入されている。

Ikeda's artificial viscosity scheme は、不規則メッシュの場合への人工拡散項を導入する差分法の拡張になっている。実際、図6のような分割の場合には、Ikeda's scheme は、 $x, y$  両方向に  $\max \left\{ 0, \frac{1}{2} (h_1^2 + h_2^2)^{\frac{1}{2}} (b_1^2 + b_2^2) - a \right\}$  を拡散係数とする人工拡散項を導入する差分近似と一致する。

#### Scheme E: Ikeda's partial upwind scheme

人工拡散はもとより、上流近似も数値解の“はまり”原因になることはよく知られている。この数値解のはまりをできるだけ小さくすることを目的に考察されたものがこのスキームである。この方法でも移流項の弱型式は(4)に変形・近似されるが、外心領域の境界  $\partial C_i$  上での未知関数の値は、

$$\beta (\text{上流側節点値}) + (1-\beta) (\text{両側の節点値の平均})$$

で近似される。ここに  $\beta$  は  $0 \leq \beta \leq 1$  なる量で、上流型近似の割合を示す。 $\beta$  の値は離散最大値原理の成立が保障される範囲内の最小値として決定される。そのような  $\beta$  の値は  $a, |b|$  などから簡単に計算することができる。なお、Scheme C では  $\beta = 1$ 、Scheme D では  $\beta = 0$  になっていることから、Scheme E は、Scheme C と Scheme D の中間的な手法ともいえる。

る。

## 数値計算例

長方形領域および円環領域でのいくつかの定常問題の数値計算を行った。その結果、

A. 全般的にみて、Ikeda's partial upwind scheme の誤差が一番小さい。

B.  $|b| \cdot (\text{空間きざみ幅})$  が小さいときには、Ikeda's artificial viscosity scheme による数値解の誤差は upwind

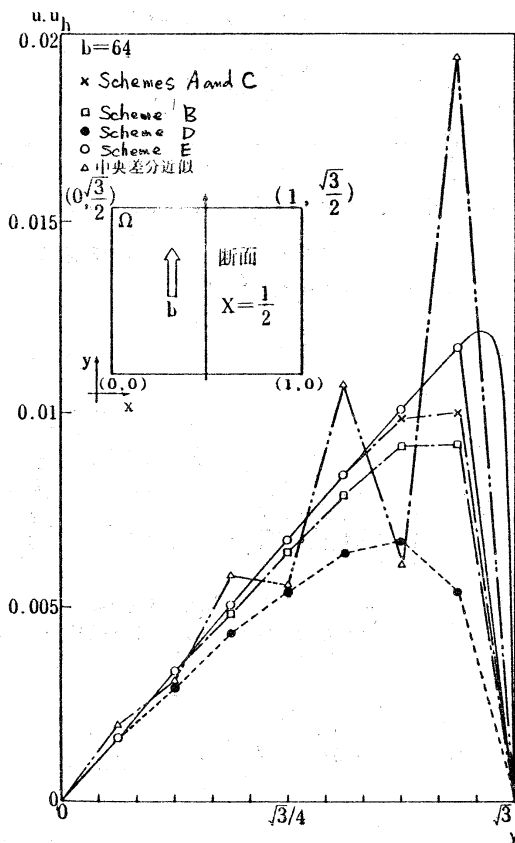


図 7 断面  $x=\frac{1}{2}$  での真の解と  $x$  方向,  
 $y$  方向を 8 等分したときの数値解  
(例題 1,  $b=64$ )

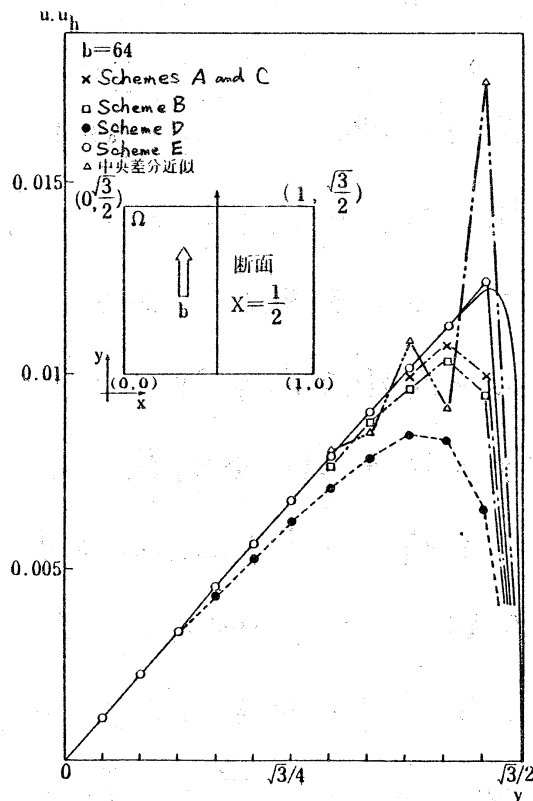


図 8 断面  $x=\frac{1}{2}$  での真の解と  $x$  方向,  
 $y$  方向を 12 等分したときの数値解  
(例題 1,  $b=64$ )

schemes A, B, C のものより、  
さいわい、 $|b|$  (空間さざみ幅)  
が大きくなるとその関係は逆  
転する。

ことがわかった。

(例題 1)

領域  $\Omega \equiv (0,1) \times (0, \frac{\sqrt{3}}{2})$  とし

定常問題

$$b \frac{\partial u}{\partial y} = \Delta u + 1 \text{ in } \Omega, \quad u|_{\partial\Omega} = 0$$

を数値的に解いて、その結果

と比較した。(図 7~9)

ここに  $b =$  正定数である。

領域  $\Omega$  の有限要素分割は  $x$  方  
向,  $y$  方向を同じ分割数で等  
分割して得られる Friedrichs-Keller  
型の分割とした。例題 1 の真

の解と数値解の断面  $x = \frac{1}{2}$  での profile を比較したのが図 7

( $b=64, 8$  等分), 図 8 ( $b=64, 12$  等分), 図 9 ( $b=16, 12$  等分)

である。中央差分近似では離散最大値原理が成立しないため、

その数値解は振動する (図 7, 図 8 中の  $\Delta$ )。

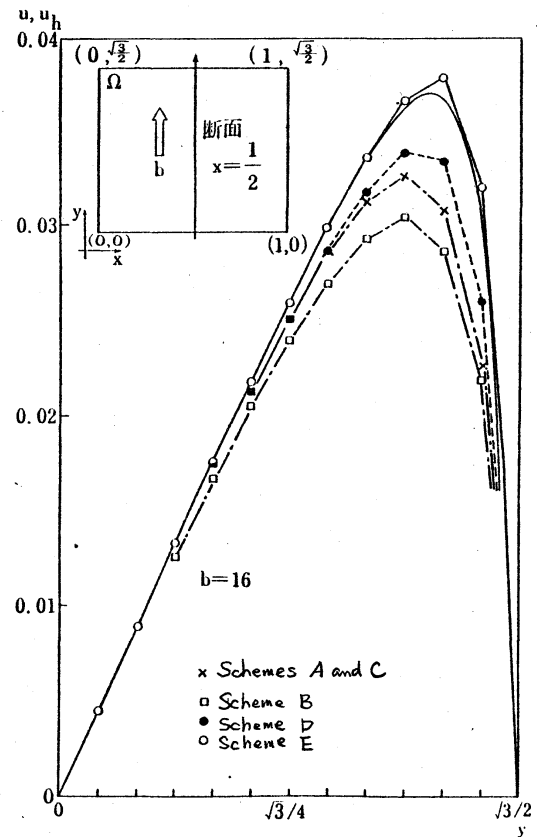


図 9 断面  $x = \frac{1}{2}$  での真の解と  $x$  方向,  
 $y$  方向を 12 等分したときの数値解  
(例題 1,  $b=16$ )

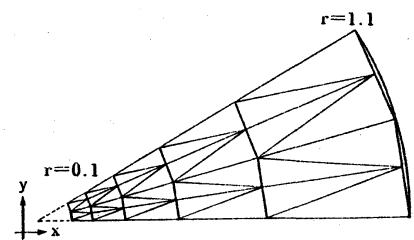


図 10  $\Omega_1$  の有限要素分割例  
( $r$  方向 5 分割,  $\theta$  方向 4 分割)

(例題 2)

領域  $\Omega \equiv \{(x, y); (0.1)^2 < x^2 + y^2 < (1.1)^2\}$  として、

定常問題

$$-\frac{bx}{x^2+y^2} \frac{\partial u}{\partial x} - \frac{by}{x^2+y^2} \frac{\partial u}{\partial y} = \Delta u + 1 \quad \text{in } \Omega, \quad u|_{\partial\Omega} = 0$$

に対する数値結果を比較した。ここに、 $b = \text{正定数である}$ 。数値計算に当っては領域およびデータの対称性から、 $\Omega$  のうち  $\Omega_1 = \{(r, \theta); 0.1 < r < 1.1, 0 < \theta < \frac{\pi}{6}\}$  ととり出し ( $(r, \theta)$  は極座標系), 付加境界条件

$$\frac{\partial u}{\partial r} = 0 \quad \text{on } \theta = 0 \quad \text{and } \theta = \frac{\pi}{6} \quad \text{と与えた。領域}$$

$\Omega_1$  は図 10 のように有限要素分割した。例題 2 の真の解と数値解の断面  $\theta = \frac{\pi}{12}$  での profile を比較したのを図 11 ( $b=64$ ), 図 12 ( $b=16$ ) である。

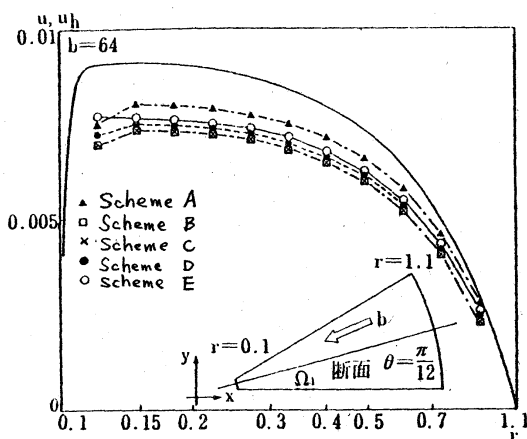


図 11 断面  $\theta = \frac{\pi}{12}$  での真の解と  $r$  方向を 12 分割,  $\theta$  方向を 8 分割したときの数値解 (例題 2,  $b=64$ )

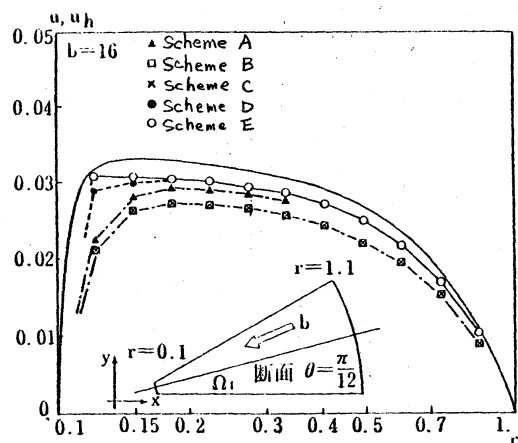


図 12 断面  $\theta = \frac{\pi}{12}$  での真の解と  $r$  方向を 12 分割,  $\theta$  方向を 8 分割したときの数値解 (例題 2,  $b=16$ )

## References

1. K. BABA & M. TABATA, "On a conservative upwind finite element scheme for convective diffusion equations," R.A.I.R.O. Numerical Analysis, v. 15, 1981, pp. 3-25.
2. P.G. CIARLET & P.A. RAVIART, "General Lagrange and Hermite interpolation in  $R^n$  with applications to finite element methods," Arch. Rational Mech. Anal., v. 46, 1971, pp. 177-199.
3. T. IKEDA, "Artificial viscosity in finite element approximations to the diffusion equation with drift terms," Lecture Note in Num. Appl. Anal., v. 2, 1980, Kinokuniya, pp. 59-78.
4. 池田, "初流に伴う拡散現象の数値解析 - 空間二次元有限要素法 -" 電力中央研究所研究報告, 1980.
5. T. IKEDA, "Finite element approximations for diffusion equation with considerable drift terms," in preparation.
6. T. IWAKI, "Comparison of FEM and triangular FDM in heat conduction problems," Theoretical Appl. Mech., v. 23, 1975, pp. 279-288.
7. H. KANAYAMA, "Discrete models for salinity distribution in a bay: conservation law and maximum principle," Theoretical Appl. Mech., v. 28, 1978, pp. 559-579.
8. F. KIKUCHI, "The discrete maximum principle and artificial viscosity in finite element approximations to convective diffusion equations," Institute of Space and Aeronautical Science Report, No. 550, 1977.
9. M. TABATA, "A finite element approximation corresponding to the upwind finite differencing," Mem. Numer. Math., v. 4, 1977, pp. 47-63.
10. M. TABATA, "Uniform convergence of the upwind finite element approximation for semilinear parabolic problems," J. Math. Kyoto Univ., v. 18, 1978, pp. 327-351.
11. M. TABATA, " $L^\infty$ -analysis of finite element method," Lecture Note in Num. Appl. Anal., v. 1, 1979, Kinokuniya, pp. 25-62.
12. M. TABATA, "Some applications of the upwind finite element method," Theoretical Appl. Mech., v. 27, 1979, pp. 277-282.
13. M. TABATA, "Conservative upwind finite element approximation and its application," Analytical and Numerical Approaches to Asymptotic Problems in Analysis, (S. Axelsson et al. Ed.), North-Holland, 1981, pp. 369-381.